

次の【文章Ⅰ】は稲垣栄洋『雑草はなぜそこに生えているのか』の一部であり、

【文章Ⅱ】は永田和宏『知の体力』の一部である。これらを読んで、後の問いに答えよ。

【文章Ⅰ】

生物の世界の法則では、ナンバー1しか生きられない。これが、厳しい鉄則である。

①「ガウゼの法則」と呼ばれるものである。

ソ連の生態学者ケオルギー・ガウゼ（一九一〇～八六）は、ゾウリムシとヒメゾウリムシという二種類のゾウリムシを一つの水槽でいっしょに飼う実験を行った。（1）水や餌が豊富にあるにもかかわらず、最終的に一種類だけが生き残り、もう一種類のゾウリムシは駆逐されて、滅んでしまうことを発見した。こうして、強い者が生き残り、弱い者は滅んでしまう。つまり、生物は生き残りを懸けて激しく競い合い、共存することができないのである。

ナンバー1しか生きられない。これが自然界の厳しい掟である。自然界でナンバー2はあり得ないのである。なんとという厳しい世界なのだろう。

しかし、不思議なことがある。

ナンバー1しか生きられないのであれば、この世には一種類の生き物しか存在できないことになる。それなのに、自然界を見渡せば、さまざまな生き物が暮らしている。ナンバー1しか生きられない自然界に、どうして、こんなにも多くの生物が存在しているのだろうか？

じつは、ガウゼの実験には続きがある。

ゾウリムシの種類を変えて、ゾウリムシとミドリゾウリムシで実験してみると、今度は、二種類のゾウリムシは一つの水槽の中で共存したのである。

どうして、この実験では二種類のゾウリムシが共存しえたのだろうか。

じつは、ゾウリムシとミドリゾウリムシは、棲む場所と餌が異なるのである。ゾウリムシは、水槽の上の方において、浮いている大腸菌を餌にしている。一方、ミドリゾウリムシは水槽の底の方において、酵母菌を餌にしている。

このように、同じ水槽の中でも、棲んでいる世界が異なれば、競い合う必要もなく共存することが可能なのである。（2）水槽の上のナンバー1と水槽の底のナンバー

勘違いしてはいけないのは、オンリー1のナンバー1を指すという先述の話は、「生物の種」の話ということである。たとえば、私たちは人間という種であり、おそらくは知能をハッタツさせて自然を都合よく作り変えるというオンリー1でナンバー1の種ということになるのだろうか。

私たち一人一人は、生物種の中の「個体」だから、種という集団の中で、必ずしもニッチを棲み分けなければならないということではない。

しかし、ナンバー1になれるオンリー1を探すという生物の世界の営みは、生きづらい人間の現代社会を生き抜くのに、とても役に立つ考え方であるように思う。

自然界の競争によく似ているのは、芸能界である。

芸能界は「キャラが被る」ということを嫌う。番組の中で同じキャラの人は二人はいらない。キャラが被ると、出演できる番組の数はそれだけで減ってしまう。そして、個性が失われ、やがてはどちらかだけが生き残り、どちらかは無情にも芸能界から消えてしまうのである。

キャラ作りという点でわかりやすいのがお笑い芸人だろう。お笑い芸人の人たちは、他のお笑い芸人と区別してもらうために、印象に残りやすいさまざまなキャラ作りをして、個性を出そうとしている。

また芸能人の中には、アイドルなのに歌が下手だとか、バンドマンなのに楽器が弾けないとか、ブサイクだとか、仕事がなくて落ち目だとか、常識で考えたら、致命的な欠点ではないかと思えるようなことを魅力として、人気を得ている人もいる。けっして、誰もが思うようなナンバー1である必要はない。

個性を磨くときには、「こうあるべき」という常識を疑って、捨ててみることも大切だろう。雑草も、「生き抜くには競争に強くなければならない」「光を得るためには、縦に高く伸びなければならぬ」という常識とは違うところで成功しているのである。

生物は不均一でバラバラである。（3）それでは理解するのに不便なので、人間は平均値を取る。そして平均値で、その集団を代表させるのだ。学力テストのような数値のまとまりでは平均値を出すことはできる。しかし、それは学力テストという一本の物差しで測っただけの数値だ。生物は、もつとたくさんの物差しを持つ個性的な存在で

1というように、ナンバー1を分け合っているのだ。これが「棲み分け」と呼ばれるものである。

同じような環境に暮らす生物どうしは、激しく競争し、ナンバー1しか生きられない。しかし暮らす環境が異なれば、共存することができるのである。

ナンバー1しか生きられない。これが自然界の鉄則である。それでも、こんなにもたくさんの生き物がいる。つまり、すべての生き物が、どこかの部分でそれぞれナンバー1なのである。

ナンバー1であることが大事なのか？ オンリー1であることが大事なのか？

この答えはもうわかりだろう。

すべての生物はナンバー1である。そして、ナンバー1になれる場所を持っている。この場所はオンリー1である。つまり、すべての生物はナンバー1であると同時に、オンリー1なのである。

このナンバー1になれるオンリー1の場所を生態学では、「ニッチ」という。ニッチはそれぞれの生物が固有に持つものである。ニッチは場所の場合もあるし、餌の場合もあるし、環境の場合もある。「ニッチ」とは、もともととは、装飾品を飾るために寺院などの壁面に設けたくぼみを意味している。やがてそれが転じて、生物学の分野で「ある生物種が生息するハンインの環境」を指す言葉として使われるようになった。生物学では、ニッチは「生態的地位」と訳されている。一つのくぼみに、一つの装飾品しか飾ることができないように、一つのニッチには一つの生物種しか住むことができない。

マーケティングではニッチ戦略というと、小さな隙間のような意味として使われるが、生物にとつては単に隙間を意味する言葉ではない。すべての生物が自分だけのニッチを持っている。大きいニッチもあれば、小さいニッチもあるが、ジグソーパズルのピースがぴったりと組み合わせるように、生物はニッチを分け合っている。仮にニッチが重なれば、重なったところでは激しい競争が残り、どちらか一種だけが生き残る。まさにゾウリムシの実験が示したとおりだ。

③雑草は、競争を避けて攪乱のあるところに生えるというのが、生存戦略だ。しかし、雑草の中にもさまざまな種類がある。植物は集まって生えているので、どのようにニッチを分け合っているのかわかりにくいだが、無秩序に生えているように見える草むらであっても、植物がニッチを分け合っていると考えられている。

ある。平均値は、人間が管理するのに都合が良いように、一本の物差しだけを取り出して計測し、足して、割っただけの数値に過ぎない。そして、平均値から、あまりに外れた値は、「異常値」として棄却する。しかし、得てして平均値から遠く離れた異常値が生き残ったり、新たな進化を生む原動力になったりするのが生物の世界だ。

雑草の世界を見てほしい。小さいものも大きいものもある。早く芽を出すものも、遅く芽を出すものもある。雑草にとつて大切なのは、それぞれが「違う」ということで、それが優れていてどれが劣っているということではない。「個性」には平均的な個体もなければ、平均以下という言葉もないのだ。

（4）私たちはよく「普通」という言葉を使う。しかし、「普通」とは何だろう。平均値が普通なのだとしたら、「普通」というものは、存在しない。「普通」というのは幻の存在なのだ。

人間の世界では、「普通」というのは、「こうあるべき」という存在だつたりする。人間の思う「こうあるべき」の凝り固まったカタマリが「普通」である。

しかし、雑草は、「こうあるべき」でないとどこかで勝負して、成功しているのである。

あなたが、ナンバー1になれることは何だろうか。

これを見つめることは簡単ではないかも知れない。しかし、あなたがナンバー1になれる簡単な方法がある。

もつとも簡単にナンバー1になれる種目は、「あなたらしさ」である。

「あなたらしさ」という種目で、あなたにかなう人はいない。そうだとすれば、「あなたらしさ」を磨き、「あなたらしさ」を高めることが、ナンバー1になるもつとも近道ということになる。

もつともやっつてはいけないことは人と比較することだ。誰かを目指している限り、あなたはナンバー1になれることはないのだ。誰しも得意なことはある。努力しなくても、簡単にできてしまうこともあるし、努力してもなかなかできないこともある。努力しなくても、できてしまうことを徹底的に努力するというのも、ナンバー1になる一つの方法だろう。

⑤【 】なことに、好きでもないのになぜかできてしまうことと、好きなになかなかできずに苦手なことというのがある。できれば、好きなことを選びたい。あるいは、

得意なことなのに、絶対に勝てそうにないライバルがいることもある。

そんなとき参考になるのが、生物の「ニッチシフト」だ。

ナンバー1になれるオンリー1の場所がニッチである。それは、自分の得意なことや、好きなことになる。そこで、少しずつずらしながら、その周辺で自分のニッチを探すのだ。好きなのに苦手なことは、少しずつせば、得意なことになるかも知れない。得意なのに好きでもないことは、少しずつせば、好きなことになるかも知れない。

「ずらしてみる」というのは生物にとって、重要な戦略である。

すべての生物は、そうやってずらしながら、ナンバーワンになれるニッチを求めているのである。

【文章II】

私は「らしく」という言葉がきらいである。世の中、「らしく」という言葉が蔓延しすぎていないだろうか。

考えてみれば、私たちは小さいときから、この「らしく」ありなさいという強制、あるいは無言の圧力を受けてきたのかもしれない。「子どもらしく」「男の子らしく」「女の子らしく」に始まって、「小学生らしく」「中学生らしく」「高校生らしく」「学生らしく」「青年らしく」などと、「らしく」のオンパレードである。優等生は優等生らしく、スポーツ選手はスポーツ選手らしく、新人は新人らしくあらねばならない。この世のなか、どんな場面においても、それぞれ「らしく」が求められているようだ。「らしく」としてよく使われ、聞くたびに吹き出してしまうのが、「自分らしく」という「らしく」である。ちょっと考えて、これほど無意味な「らしく」もないのではないか。そもそも「自分」という存在がもつともやっかいでわかりにくい存在である。どう振舞えば「自分らしい」のか。

自分と言っても、さまざまな要素があつて、永田和宏と言えば、身長は170数センチ、男やもめであり、大学の教授である。歌人でもあり、などなど。さて、私がもし「自分らしく生きたい」と言ったとしたら、私はそれらさまざまな私という成分のどれを意識して「らしい」と思っているのだろう。どの一部をとってみても、それは私という存在そのものではあり得ず、またその全体をひっくりかえした総体としての私を考えてみるな

問一 部 a の漢字はその読みを答え、カタカナは漢字に改めなさい。

問二 空欄 (1) (4) に入る言葉として適当なものを次から選び、記号で答えなさい。ただし同じ記号を繰り返してはいけません。

ア つまり イ あるいは ウ しかし エ すると

問三 部①とありますが、それはどのようなものですか。説明しなさい。

問四 部②とありますが、その理由を説明した次の一文の空欄に入る言葉を本文中より四字で抜き出ささい。

すべての生物がナンバー1を分け合う () を行っているから。

問五 部③とありますが、雑草の生存戦略の説明として適当ではないものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 雑草は無秩序に生えているようで、実はニッチを分け合って共存していること。
イ 雑草は競争に強くなければならず、縦に高く伸びなければならぬということ。
ウ 雑草には小さいものや大きいものがあつたりして、それぞれが違うということ。
エ 雑草にとってはどれが優れていてどれが劣っているかは問題ではないということ。

オ 雑草は「こうであるべき」という常識とは違うところで勝負していること。

らば、それはそもそも私そのものなのであるから、「らしく」という概念ではくくれないはずなのである。「自分らしく」やっていきたい、などという言葉を聞くたびに、なら意味のない言葉のトートロジーでしかないじゃないかと思ってしまう。

注 トートロジー——同語反復。同じことを表す言葉の無意味な繰り返しのこと。
「善人はよい人だ」の類。

問六 部④とありますが、どのように言えるのはなぜですか。説明しなさい。

問七 空欄 ⑤ に入る言葉として適当なものを次から選び、記号で答えなさい。
ア 皮肉 イ 単純 ウ 唐突 エ 危険 オ 意外

問八 次に示すのは、【文章I】・【文章II】を読んだ後に、三人の生徒が話し合っている場面です。本文の趣旨を踏まえ、空欄 に入る発言として最も適当なものを後の選択肢から一つ選び、記号で答えなさい。

生徒A——【文章I】に、生物の世界の法則ではナンバー1しか生きられないとあり、ドキッとしたけど、ニッチを分け合うことでさまざまな生物が共存できているとわかって、ちょっと安心したよ。

生徒B——ところで、ナンバー1になる方法について、【文章I】では「あなたらしさ」を磨いて高めることが近道だと述べている。たしかに自分という人間は一人しかいないし、人はみんな違うわけだから、この主張には納得できるね。

生徒A——でも、【文章II】には「自分らしく」という言葉ほど無意味なものはないとある。「自分らしく」と「あなたらしさ」が同じ意味だと考えると、【文章I】と【文章II】は矛盾していることにならないかなあ。

生徒C——それはどうだろう。【文章II】で筆者が「らしく」という言葉をきらつている背景には、「らしく」という言葉の持つ、「らしく」ありなさいという同調圧力や、「らしく」ないものを排除することへの批判があると思う。同調圧力や異質なものを排除することへの批判は、【文章I】からも読み取れるので、【文章I】と【文章II】は大筋では矛盾していないと思うんだけど。

生徒B——なるほど。そもそも【文章I】には、すべての生物はオンリー1だと語られていて、芸能人の例をあげて、誰もが思うようなナンバー1である必要はないとある。これらは、【文章II】の筆者が「らしく」という言葉を

きらうことと同じ方向の主張だね。

生徒C——あと【文章Ⅱ】の筆者が「自分らしく」を無意味だと述べる理由には、
□と考えたこともあると思う。【文章Ⅰ】でも、自分の得意や「好き」を少しずらしてニッチを探さねばならないと述べているけれど、【文章Ⅱ】のこの認識を前提として共有しているからだとも説明できると思うよ。

ア 「自分」という存在がやっかいで、コントロールできない
イ 「自分」という総体的なものを、分解しきれていない
ウ 「自分」と「自分らしさ」は、まったく違った考え方である
エ 「自分」という存在はわかりにくく、ひとつくくりにはできない

一

次の文章は、宮島未奈「成瀬は天下を取りに行く」の一節である。中学二年生の「わたし」（島崎みゆきは）、幼なじみの成瀬あかりに誘われ、M・1グランプリに挑戦することになった。コンビ名も「ゼゼカラ」に決まり、お笑いの頂点への第一歩を踏み出そうとしていた。以下はそれに続く場面である。これを読んで、後の問いに答えなさい。

出場が決まった以上は全力を尽くさなければならない。わたしは予習のためにネット配信で過去のM・1グランプリを見ることにした。わたしは二〇〇六年生まれだから、第一回から第五回の頃はまだ生まれていない。テレビのリモコンを操作しながらどれを見ようか迷っていると、母がやってきて隣に座った。

「2004見よう」

母が神回と言うとおり、テレビで見知ったコンビが多く出場していた。今ではバラエティ番組で司会をやっているような芸人も、若手時代はこうしてネタをやっていたのだと新鮮に感じる。

優勝したアンタッチャブルのネタは彼女の父親のもとへ結婚の挨拶に行く筋書きで、今でも古びない面白さだった。母は笑いすぎて涙まで流している。

その後も母のおすすめに従って、ところどころ飛ばしながら見た。これまでただの視聴者として気楽に見ていたのに、どうしてこんなボケを思いつくのだろうとか、そのツッコミのタイミングはすごいとか、演者側の視点が芽生えてくる。

数年後、成瀬が本当にお笑いの頂点に立つとしたら、相手はわたしなのか、別の誰かなのか。今はまだ、頂点どころか麓さえ見えないぐらいに遠い。

週明けの九月七日の朝、マンションのロビーで会うなり成瀬が「ネタを考えてきたから、後でやるう」と言い出した。内心楽しみにしていたものの、やる気満々だと思われたくなくて「別にいいけど」と返事する。

部活が終わって帰宅してから、わたしの部屋でネタ合わせをはじめた。

「どうだろうか」

成瀬が差し出したルーズリーフには「成」と「島」の頭文字とお互いのセリフが書き込まれていた。

成「はいどうもー」

島「私が島崎で」

成「私が成瀬です」

二人「膳所から来ましたゼゼカラです、よろしくお願います」

島「私な、大きくなったらプロ野球選手になりたいねん」

成「よう言うわ。あんた野球のルールすら知らんやん」

島「知っとるよ。投げて打つんやろ」

成「雑やな」

島「あんた私のポテンシャル知らんな」

成「言うてももう中二やで、有力選手ならすでに頭角を現してる頃や」

島「ドラフトで指名されたらワンチャンあるやんか」

成「なんで指名されるつもりやねん」

島「普段からこのユニフォームを着てうろろしてたら、もしかしたら野球少女と間違われるかなって」

成「ただの不審人物やないか」

冒頭を読んだだけで眉間に力が入ってしまった。言いたいことはたくさんあるが、一番の問題点を指摘する。

「わたし関西弁しゃべれないんだけど」

標準語の両親に育てられたため、わたしはほぼ標準語のイントネーションで話す。相手につられて関西弁の語尾が出ることもあるが、うまくしゃべれている気がしない。

「成瀬だって普段関西弁じゃないじゃん」

「その気になったらしゃべれんねん」

両親とも滋賀生まれなだけあって、成瀬の関西弁は自然だった。

「過去のM・1グランプリを分析したら、関西芸人が圧倒的に有利だとわかった。ゼゼカラの名にかけても関西弁で行ったほうがいいと思ったんだ」

「でも使い慣れない言葉よりも普段どおりの言葉のほうがいいよ」

関西弁であることを脇に置いて成瀬の台本は微妙だ。意味の伝わる日本語で書かれている点や双方の掛け合いになっている点は評価できるが、これではただの会話である。

まだ一年目という甘えがあるのだろうか。どうせやるなら初年度からできる限りのパフォーマンスを見せるべきではないか。

この思いをどう伝えたらいいのだろう。モヤモヤと考えているうちに、せっかく考えてくれた成瀬に申し訳なくなってきた。一度台本通りに演じて見ようと提案した。壁を背にして並んで立ち、二人とも見えるように真ん中でルーズリーフを持つ。

「はいどうもー！」

「膳所から来ましたぜカラです、よろしくお願いします！」

だれにも聞かれていないはずなのに恥ずかしくなる。関西弁らしく聞こえるように努めたが、不自然さは避けられない。最後までやり終えたらどんな顔をしていいかわからなくなり、黙ったままテーブルに向かい合って座った。

「成瀬、このネタ本当に面白いと思う？」

わたしがルーズリーフを指差して^②「**刀**」に入ると、成瀬は真剣な顔で「面白くはないな」と認めた。

「わたしも考えるよ。まず、テーマが野球という時点で無理があると思う。野球に詳しい人はたくさんいるし、野球をネタにするコンビもかなり多い。わざわざ詳しくないテーマで勝負する必要はないでしょ。あと、ボケに意外性がないんだよね。もっと突き抜けたボケをしないとダメだと思う」

口が開いたら思いがけずすらすらとダメだししてしまった。

「ごめん、言い過ぎた」

「遠慮しなくていい。なんでも言い合えるコンビの方が伸びる」

成瀬はルーズリーフに「野球は×」「突き抜けたボケ」などとメモする。

「鳥崎はどういうテーマがいいと思う？」

「もっと身近なテーマでいいんじゃないかなあ」

成瀬が野球をテーマにした気持ちもわかる。わたしたちは西武ライオンズのユニフォームを着て舞台上がろうとしているのだ。見ている側も野球を連想するだろう。しかしわたしにとってこのユニフォームは西武大津店との思い出である。

「たとえば西武大津店からネタにつなげるとか」

成瀬は新しいルーズリーフを取り出し「西武大津店」とメモした。

「成瀬が将来大津にデパート建てると言ってたじゃん、それもネタになると思うんだ」

(中略)

翌日、下校中に成瀬とネタについて話した。

「プロの漫才がいかに面白いかわかるな」

成瀬の言うとおり、プロとはまったくレベルが違う。

「大きな声を出せばなんとかなると思ってたが、どうやらそうではないらしい」

「さすがにそんな簡単じゃないでしょ」

普段から淡々と話す成瀬が大声を出すところを想像したら笑えてきた。アンタッチャブルみたいな感じだろうか。

「そうだ、アンタッチャブルの漫才を一度コピーしてみない？」

小学生のとき、国語の教科書の本文をひたすら書き写す宿題が出た。昔の人でもあるまいし、なんで手書きでわざわざこんなことをしないとしないのだと思っていた。先生が言うには、上手な文章を書き写すことで文章のリズムがつかめるようになるという。同じように上手な漫才をそのまま演じてみたら、何かつかめるかもしれない。

家に帰ってタブレットで検索すると、M・1グランプリ決勝戦のネタの書き起こしが見つかった。動画を見て流れをつかんでから、成瀬がボケ、わたしがツッコミをやってみる。演技力は速く及ばないが、台本のクオリティが高いせいか、素人のわたしたちがかけ合えるだけでもリズムが生まれる。成瀬は大声と言うほどではないが、いつもよりテンションを上げて発声しているようだった。

「このまんまやりたいくらいだな」

成瀬も手応えを感じてくれたらしい。

「バクリじゃん」

「でも結局そういうことじゃないか？アマチュアはプロの影響を受けて、それっぽいネタをやるしかないだろう」

「こういう、途中で寸劇みたいになる流れはいいな」

「コント漫才ね」

成瀬はルーズリーフに新しくネタを書きはじめる。

鳥「最近、家の近くにあった西武大津店が閉店しちゃったんですよ」

よね。それに成瀬がシャボン玉を極めるって言ってたのも、二百歳まで生きるって言ってたのも、FM近江から全国に発信するレギュラー番組を持つって言ってたのも、紅白歌合戦に出るって言ってたのも……」

^③糸を引っ張ったら万国旗が出てきた気分だ。野球ネタなんてやっている場合ではなかった。成瀬ネタでよかったのだ。このキャラクターを生かさなない手はない。

「それは面白いのだろうか」

成瀬は訝しげな表情を浮かべて腕を組む。息をするようにスケールの大きなことを言う人間だ。そこに潜む滑稽さに気づかないのも無理はない。

「より面白くするにはやっぱり成瀬がボケのほうがいいと思うの。『わたしは二百歳まで生きる予定なんですけど』って成瀬が切り出したら、わたしが『ギネス記録大幅更新じゃん』って突っ込む。いや、突っ込ませてー！」

「鳥崎がお笑いにそんなに熱いとは知らなかった」

成瀬は感心したように言うが、わたしはお笑いではなく成瀬に熱いのだ。その面白さを広く伝えるにはどうしたらいいだろう。

「わたしが二百歳まで生きるって言って、鳥崎が『それならわたしは三百歳まで生きる』ってボケもいいと思うのだが」

成瀬が提示した案も良さそうな気がする。こんなに正解がわからないものとは思わなかった。だからこそ多くの芸人志望者が養成所に通うのだろう。一周回って成瀬の書いた野球ネタも悪くない気がしてきた。

「思った以上に難しいな」

成瀬が頭をかく。

「成瀬としては、今年はどこまで行きたいの？」

「まずは出場するだけがいいと思っていたんだ。こんなに短い準備期間で一回戦突破できるほど甘くはないだろう。だけど鳥崎に言われて、全力を尽くさなければいけないと思うようになった」

わたしはうなずく。Aという気持ちは共有できた。

「わたしもネタを考えてみるよ。また明日話し合おう」

「そうだな」

成「そんなこともあったねえ(遠い目をする)」

鳥「なんでそんな昔みたいな言い方なんだよー先月の話だよー」

成「I」

鳥「個人で!？」

成「(役に入る)皆さま、今日は成瀬百貨店大津店のオープニングセレモニーにお集まりいただきありがとうございます。創業者の成瀬あかりです」

鳥「II」

成「ここ、琵琶湖に浮かぶ最高のロケーション」

鳥「III」

成「二十八階建ての店内でごゆっくりお買い物をお楽しみいただけます」

鳥「IV」

成「なお、エレベーターやエスカレーターはございませんので、階段で移動くださいませようお願いします」

鳥「V」

成「ちなみに二十八階は食品売り場でございます」

鳥「一番上にしちやダメなやつじゃんー搬入するのも一苦労だよー」

「すごい、よくなってる」

アンタッチャブルのおかげか、最初の台本と比べたら着実に漫才らしくなっている。これならお笑いの裾野の裾ぐらいは踏めるかもしれない。

注1 M・1グランプリ——若手漫才師を対象とした漫才のコンテスト。

注2 膳所——滋賀県大津市にある地名。

注3 わたしにとってこのユニフォームは西武大津店との思い出である。

——大津市唯一のデパート西部大津店が営業を終了した際、「わたし」と「成瀬」の二人は夏休みの間、閉店までデパートに通い続けたが、その時二人は目立つようにこのユニフォームを着用していた。

問一 部a～cの語句の意味として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- a 頭角を現す
ア はっきりした結果を出し、うわさされている
イ 強い個性を持っていて、うわさされている
ウ しつかりした目標があり、目立っている
エ すぐれた才能がうかがえ、目立っている
オ 奇抜な格好をしていて、目立っている

b 脇に置く

- ア いったんその事柄を保留する
イ 念のためその事柄を検討する
ウ 一応その事柄を確認する
エ とりあえずその事柄を考慮する
オ ひとまずその事柄を取り消す

c 訝しげな

- ア 悲しそうな
イ 腹立たしそうな
ウ どうでもよさそうな
エ おもしろそうな
オ 疑わしそうな

問二 部①とありますが、その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 成瀬が自分より先にネタを書いてきたのが気に入らなかったから。
イ 成瀬がお笑いの頂点に立つときに自分は一緒にはいけないかもしれないから。
ウ 西武ライオンズのユニフォームを着て漫才をしたくなかったから。
エ ドラフトで指名されることは実際にはありえないから。
オ 成瀬が考えたこのネタで漫才ができるのか不安を感じたから。

問三 部②の■に適当な漢字を入れて四字熟語を完成させなさい。

問四 部③とありますが、この時の「わたし」の心情として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 成瀬に関するエピソードがいろいろ連なって思い浮かび、興奮している。
イ 成瀬に関するエピソードをこれまで思いつかなかったことを後悔している。
ウ 成瀬に関するエピソードを無理やりひねり出して、疲れている。
エ 成瀬に関するエピソードがたいして思いつかず、不審に思っている。
オ 成瀬に関するエピソードがたくさん出てきそうで、ほっとしている。

問五 部④とありますが、「わたし」がこのように考えた理由を説明しなさい。

問六 A にあてはまる気持ちとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア わたしたちの力では出場だけできればよい
イ どうにかして漫才のネタを仕上げたい
ウ 今持っている力で最高の漫才をしたい
エ 一回戦を突破するためだけに練習に励みたい
オ 短い準備期間で、うまく漫才ができるわけではない

問七 部⑤と「わたし」が提案したのはなぜですか。説明しなさい。

問八 空欄「I」～「V」に後の会話文をあてはめて、漫才の台本を完成させなさい。

- ア 琵琶湖の上に建てたの？
イ 誰が己の足腰で二十八階まで上がるんだよ！
ウ とんでもない建造物だな
エ 創業者ってあんまり自分で言わないけどな
オ そこで、わたしが新しくデパートを建てることにしたんです

次の文章を読んで、後の問いにこたえなさい。

注1 水戸中納言光国卿、狩りに出で給ひしに、あやしの男、年老いたる女を負ひて、道の
辺りに休みみたるを、「いかなる者ぞ」と問はせ給ひければ、知れる者有りて、「彼は人
に知られたる孝行の者にて、母を負ひて御狩りの体を押し候ふなり」と言ふ。中納言殿
大きに感じ給ひ、米銭なむあまたたまひ（③）。

その後、またある所にて、同じ様なる者に行き逢ひて問はせ給へば、母を負ひて物へ
行く由を申す。従者ども「彼は先の事聞き羨み、それに似せて物賜らむとするめり」と
囁きければ、彼の卿うち笑ひて、「狂人を真似るは狂人のたくひ、孝子を真似るは孝子
のたくひなり。よき事の真似する奴かな。それぞれ、物取らせよ」とて、先の度にかは
らず米銭をたまひけり。

〔落粟物語〕による

注1 水戸中納言光国卿——徳川光圀。後に名君、水戸黄門として庶民に愛された。

注2 あやしの男——みすばらしい姿をした男

注3 母を負ひて御狩りの体を押し候ふなり

——母親を背負って（光国卿の）狩りの様子を拝見しているのです

問一 部①の「ゐ」を漢字に改めるとしたらどの字が適當か。最も適當なものを
次から選びなさい。

- ア 寝 イ 来 ウ 居 エ 見

問二 部②「あまた」の意味として最も適當なものを次から選び、記号で答えな
さい。

- ア たくさん イ 余るほど ウ 適当に エ すべて

問三 空欄（③）に入る適當な形として最も適當なものを次から選び、記号で答え
なさい。

- ア けら イ けり ウ ける エ けれ

問四 部④「同じ様」の説明として最も適當なものを次から選び、記号で答えな
さい。

- ア 狩りにいく様子 イ 女を背負っている様子
ウ 休憩している様子 エ 物知りである様子

問五 部⑤とあるが、それはなぜか。その説明として最も適當なものを次から選
び、記号で答えなさい。

ア 従者がつまらないことを考えて、自分がだまされる心配をしていることが光国卿
はおかしかったから。

イ 親孝行の行いをしようとしたものが、結果的に狂人のように見えてしまったこと
を光国卿はばかにしているから。

ウ 道でたまたま行き逢った者の物まねが非常によくできた芸であったので、光国卿
は感心してしまったから。

エ たとえはうびが目当てであっても、親孝行の行いをするのは愉快なことだと光国
卿は思ったから。

四

文学史に関する次の各問いに答えなさい。

(1) 我が国最古の勅撰和歌集で、紀貫之による「仮名序」も有名な和歌集とは次のうちどれか。記号で答えなさい。

- ア 『万葉集』
- イ 『古今和歌集』
- ウ 『拾遺和歌集』
- エ 『新古今和歌集』
- オ 『金槐和歌集』

- ア 『ロミオとジュリエット』
- イ 『二〇〇一年宇宙の旅』
- ウ 『罪と罰』
- エ 『ドン・キホーテ』
- オ 『星の王子さま』

(2) 「月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり」の書き出しで始まる、松尾芭蕉による紀行文を次から選び、記号で答えなさい。

- ア 『枕草子』
- イ 『徒然草』
- ウ 『おらが春』
- エ 『おくの細道』
- オ 『東海道中膝栗毛』

(3) 生活に苦しみながら、わずか一年半という短い期間で『たけくらべ』『にぎりえ』といった優れた作品を残し、二十四歳の若さで亡くなった女性作家を次から選び、記号で答えなさい。

- ア 尾崎紅葉
- イ 高浜虚子
- ウ 樋口一葉
- エ 与謝野晶子
- オ 瀬戸内寂聴

(4) 二〇二三年、生誕百年を迎えた作家で、『坂の上の雲』や『龍馬がゆく』などの歴史小説や『街道をゆく』『この国のかたち』などの優れた紀行文やエッセイで、日本の文化を見つめ続けた人物を次から選び、記号で答えなさい。

- ア 大江健三郎
- イ 司馬遼太郎
- ウ 池波正太郎
- エ 三島由紀夫
- オ 石原慎太郎

(5) フランスの小説家で飛行家でもあるサン・テグジュペリによって著され、二百以上の国と地域の言葉に翻訳され、世界中で愛されている作品を次から選び、記号で答えなさい。